

佐賀県立博物館・美術館報

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 0952(24) 3947

No.79



スジグロカバマダラ（カバマダラ科）

撮影・廣川典範

Salatura genutia Cramer

カバマダラに似た蝶だが、翅脈が太く、黒くみえるので区別がつく。

佐賀県では、基山村・佐賀市・大和町・小城町・福富町・唐津市・北波多村・呼子町・鎮西町・玄海町の2市8町村で採集されている。

最近の40年間に20頭強の個体が迷蝶として採集されている。佐賀県では数少ない蝶の一つである。

西はインドから東はオーストラリアまでの東洋熱帯に広く分布し、日本での土着北限は琉球八重山諸島で、それ以外で採集されているものは、南方地域から飛んできた偶產種である。

目 次	○スジグロカバマダラ（カバマダラ科）	表紙
	○資料紹介「佐賀県の自然と昆虫」	2～3 P
	○資料紹介「明治の意匠——徳見知敬と有田の文様」	4～5 P
	○韓国の「独立記念館」見学記	6～7 P
	○常設展のご案内・昭和62年度新収蔵品展のお知らせ	
	美術館図録のご紹介	8 p

資料紹介 佐賀県の自然と昆虫

佐賀県は九州の西北部に位置し、北東部は福岡県、南西部は長崎県に接している。

県の北部は脊振山から天山へと中生代に貫入した花崗岩を主とする深成岩の尾根が東西に連なり、西部丘陵地帯は新生代第三紀堆積岩の上に、玄武岩がのっている。多良火山地帯は新生代にできた安山岩質の成層火山である。また佐賀平野は新生代第四紀に堆積した沖積平野である。北には対馬海流の流れる玄界灘、南には遠浅の干潟をもつ有明海がある。

佐賀県を代表する照葉樹林のシ・タブ林は、標高600m以下の低地にみられる。夏緑樹林(落葉広葉樹林)のブナ林は700m~800m以上の脊振山地と多良火山地にわずかに残っている。

佐賀県の昆虫類はトンボ類、蝶類、蛾類、甲虫類、セミ類、アブ類などで調査がなされている。今回は紙面の都合でトンボ類と蝶類の概要をのべる。

(1) トンボ類

佐賀県北東部の脊振山地の渓谷にはムカシトンボ、ムカシヤンマを産し、その周辺の湿地帯ではヨツボントンボ、ハッショウトンボ、オオアオイトンボが発生する。

佐賀平野のクリークには、ベニイトンボ、ベッコウトンボ、ネアカヨシヤンマ、ナゴヤサナエやホンサンエが分布する。

多良火山地帯ではムカシトンボ、ヒメサナエ、カワトンボが発生し、県北西部の玄界灘沿岸にはタイワンウチワヤンマ、ヨツボントンボ、ホソミオツネントンボ、オグマサナエ、ハネビロトンボなどの記録がある。県内に産するトンボ類は83種で、その内訳は次のようなものがある。

(1) イトトンボ科 (10種)

南方系のコフキヒメイトンボの他、ホソミイトトンボ、オオイトトンボ、ベニイトトンボなど。

(2) モノサシトンボ科 (2種)

グンバイトンボ、モノサシトンボ

(3) アオイトトンボ科 (4種)

アオイトトンボ、オオアオイトトンボなど。

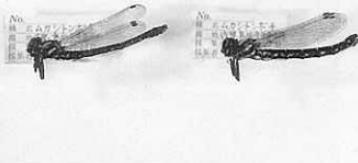
(4) カワトンボ科 (5種)

嘉瀬川水系のアオハダトンボや、ニシカワトンボ(亜種)、オオカワトンボ(亜種)、ハグロトンボ、ミヤマカワトンボが生息す。

(5) ムカシトンボ科 (1種)

ムカシトンボは、日本だけに産する貴重なトンボで、自然林の残った山間渓流に生息する。佐賀県

では、脊振山系の花崗岩帯の渓流と、多良山系の安山岩帯の渓流などの数か所で繁殖している。成虫は4月下旬から5月に出現する。産卵はフキ・ワサビ・ジャゴケなどの茎や葉の柔らかいところに産みつける。幼虫の大きさは、1.2mmと小さい1令幼虫から20mmの14令幼虫まで、6年から7年の歳月をかけて成虫となる。ムカシトンボはジュラ紀の化石にててくる「生きた化石」として有名である。



ムカシトンボ：左雄・右雌

(6) ムカシヤンマ科 (1種)

ムカシヤンマは古い型のトンボである。

(7) サナエトンボ科 (18種)

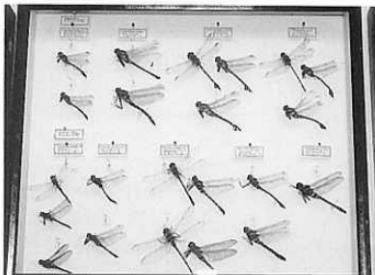
個体数の少ないオジロサナエは脊振山地や多良山地などにわずかに生息、アオサナエは嘉瀬川に、南方系のタイワンウチワヤンマは低山地から平野でも見られる。その他ナゴヤサナエ、オグマサナエ、ホンサンエなど。

(8) オニヤンマ科 (1種)

オニヤンマ

(9) ヤンマ科 (11種)

アオヤンマやネアカヨシヤンマは佐賀平野のクリークに生息する。唐津地方からはオオギンヤンマが採集されている。その他サラサヤンマ、クロスジギンヤンマ、ギンヤンマなど。



サナエトンボ科、エゾトンボ科、ヤマトンボ科

(10) エゾトンボ科 (2種)

トラフトンボ、タカネトンボがいる。

(11) ヤマトンボ科 (3種)

コヤマトンボ、キイロヤマトンボなど。

(12) トンボ科 (25種)

ハッショウトンボは最も小さい種で、ミズゴケが生える高層湿地に、ヨツボシトンボは脊振山地や唐津沿岸に生息している。ベッコウトンボは低地の池沼に生息するが産地は少ない。

[2] 蝶類

佐賀県内で採集された蝶は97種で、その中には他の地域より移動してきた迷蝶が12種含まれている。



佐賀県で特色ある分布をする蝶

(1) セセリチョウ科 (12種)

クロセセリは5月上旬から11月中旬まで全県下の平地から低山帯にみられ、食草はショウガとミョウガで、九州が分布北限となっている。



クロセセリ

(2) アゲハチョウ科 (11種)

ミカドアゲハは東洋熱帯に分布、日本は分布北限にあたる。オガタマノキを食草とし市街地でみられるようになる。ナガサキアゲハ、カラスアゲハ、ジャコウアゲハはミカン園の発達と共に多い。

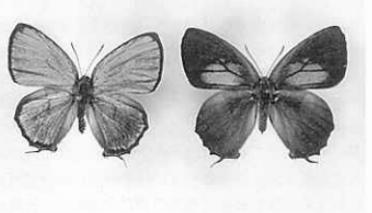
(3) シロチョウ科 (12種)

エゾスジグロシロチョウは脊振山地や馬渡島・加唐島などで採集され個体は数少ない。迷蝶としてウラナミシロチョウ、ウスキシロチョウ、ホシ

ボシキチョウ、ダイワンモンシロチョウなど。

(4) シジミチョウ科 (23種)

九千部山や脊振山のブナ林、アカガシ林には、フジミドリシジミやキリシマミドリシジミが生息し、クヌギ・コナラ・ミズナラにはアカシジミやミズイロオナガシジミが生息する。天山ではタッパンルリシジミが採集されている。西部丘陵地はダイワツバメシジミが武雄・大町で採集され、キリシマミドリシジミが国見山で採集されている。東松浦地方や玄界の島々では、ミヤコグサを食草とするシルビアシジミ、タイトゴメを食草とするクロツバメシジミやシバハギを食草とするダイワンツバメシジミを産する。多良岳・経ヶ岳の渓谷には、早春スギタニルリシジミが舞い、山の中腹以上では、ウラキンシジミやキリシマミドリシジミが生息する。



キリシマミドリシジミ：左雄・右雌

(5) テングチョウ科 (1種)

テングチョウ

(6) マダラチョウ科 (4種)

アサギマダラの他、偶産種としてカバマダラ、スジグロカバマダラ、リュウキュウアサギマダラの3種がある。

(7) タテハチョウ科 (24種)

オオウラギンスジヒョウモンは北東部の山地に発生する。イシガケチョウは県内の平地から低山地に分布するが、個体数は少ない。迷蝶としては、アオタテハモドキ、メスアカムラサキ、リュウキュウムラサキの他に、唐津市でタテハモドキが採集されている。

(8) ジャノメチョウ科 (10種)

サトキマダラヒカゲは日本特産種で、県下に広く分布しているが、ヤマキマダラヒカゲは脊振山系のブナーミヤコザサ群落に限り分布している。ウスイロコノマチョウは迷蝶である。

(資料係長 田中 裕)

資料紹介・工芸

明治の意匠

一徳見知敬と有田の文様

先年『有田の文様2・徳見知敬篇』で紹介された館蔵資料「古伊万里様式陶磁器図案集」全139枚¹を前に、当時の先鋭的な工業デザイナーであり、陶磁史への造詣も深かった徳見知敬の生きたエネルギーッシュな明治の有田と有田焼を探ってみよう。

知敬は小城藩士徳見知愛（一明治38年没、80歳²）の長男として、安政元年（1854）現在の佐賀県小城市に生まれる。藩校で漢学を修めた後、長崎で国学を学び、宣教師本居宣長に接し世界への視野を拓げる、いわば当時のエリート官僚教育を受けている。明治5年（1872）有田区長として赴任する父知愛とともに一家は有田へ移る。

この年1月、中央では翌6年に開催されるヴィエンナ万国博覧会のために大隈重信、佐野常民をそれぞれ総裁、副総裁に事務局が設立される。有田で石炭窯や酸化コバルト顔料の使い方を指導したドイツの化学者ワグネルを顧問に迎え、藩政時代から近代産業の導入に力を入れてきた京都、石川、愛知、佐賀、鹿児島に対して積極的な出品勧誘があった。海外貿易に乗り出していた有田商人田代慶右衛門、平林伊平は博覧会御用達の命を受け、事務局から派遣された納富介次郎の指導、監督のもとに明治の有田焼をヨーロッパ向けに製作するという大役を果たすことができた³。日本の出品物は好評で、とくに有田、瀬戸、薩摩、京都などの陶磁器は賞を受ける成功をおさめた。なお、博覧会へは佐野以下、技術伝習生24名一陶磁では官吏納富、有田の川原忠次郎一が渡欧、帰國後起立工商社を設立する松尾儀助も同行している。

19歳の知敬が飛び込んだ有田は、世界を相手に躍動する刺激にあふれる土地だった。さらに彼の未来が有田と有田の陶磁器に魅きつけられていった経緯を考えてみれば、前述の納富介次郎の有田滞在を無視するわけにはいかない。知敬と同郷で小城藩士の家に生まれた10歳年長の介次郎（1844-1918）は、日本画、南画に通じ、当時としては革新的な洋画を修得しただけでなく、若くして海外貿易の重要性を上海で実地で研修し、日本の殖産興業政策を世界に向けて稼動させるための工芸指導に力を注ぐ。万国博覧会、内国勧業博覧会の出品監督から審査までに直接かかわり、産業工芸振興の基盤を築きあげるために石川、富山、香川、佐賀の工業学校創立に奔走した。

明治5年以降、断続的にはあったが大先輩介次郎から絵画を学んだ知敬は、写生に徹した厳しい西

洋式の指導を受け⁴、欧米に通用するアイデアを自らデザインして職人の意識を鼓舞する積極的な姿勢に強い感銘を受けたにちがいない。同8年、深川栄左衛門、深海墨之助、手塚亀之助、辻勝蔵の設立した香蘭社に加わり、新しい陶磁器デザイン（陶画）の研究開発に没頭することになる。同12年、香蘭社に深川を残して、深海、手塚、辻は先端技術を身につけた川原忠次郎で陣容をかため、新しく精磁会社を発足させる。翌13年新会社に移った知敬は陶画部門で力をつげ、後には「特に古伊万里様式の図案に長じた⁵」と評されている。

明治21年には田代呈一と有田起業会社一蒸氣機関を使った陶土製造業一を創立するが、不況にあり8年後には法人化される⁶。

明治31年、同33年開催のパリ万国博覧会のため佐賀県陶磁器出品協会が組織され、佐賀県知事を会長に、再び技師長として納富介次郎が迎えられる。狩野探令（東京）、和田重太郎（石川）の絵画、図案、寺内信一（山口）の彫刻などの新知識を導入、今回は図案指導に有田からも「介堂（介次郎の号）門下」知敬が協力メンバーに登場、技師達はそれぞれ庶元を巡回して出品物製作の指導にあたった⁷。この頃ぶれからもわかるように、介次郎の理想とする産業工芸は単なる日本趣味をデザインするのではなく、日本文化の精神を陶磁器の形で表現するものでなくてはならなかった。

明治33年（1900）パリ万国博覧会開催、ここで人々を驚かせたのは、流れぐようなフォルムと自然の息吹きにあふれる草花や昆虫を素材に、自由奔放な意匠と色彩に満ちたアール・ヌーヴォー様式だった。緻密で写実的な意匠、技巧を駆使した細工の重厚さを競ったこれまでの美術工芸の概念は新世紀誕生とともに過去の遺物となりて、美術、工芸、建築から音楽、舞踏にいたるまで、時代は「新芸術」に向かって走り出す。

前年有田徒弟学校の一員となった知敬は、翌33年発足した佐賀県工業学校有田分校の中心メンバーとなり、寺内信一らと図案絵画科、製陶科（明治36年第1回卒業生12名）を指導⁸。また同年三川内に開か



「1900年パリ万国博覧会臨時博覧会事務局報告・下」より

された陶磁器意匠伝習所の夏季講座では島田佳矣（明治35年以降東京美術学校教授）とともに図案を教える¹¹。

明治34年には、パリ博出品者総代として渡欧した深川忠次が帰朝¹²、アール・ヌーヴォー・ショックを有田に伝える。この新しいアイデアは、知敬の図案集中でも美術工芸品志向の強い花生にいちばんよく試みられる。唐草文や宝珠文、印度文と記された瑞獸文を筆使い、構成とともに豪とした古典型にまとめる一方、伝統的な壺、瓶の器形はそのままに、浮彫や形変わりの耳を効果的に配して斬新な意匠を考案、そこには単純明快な線でデザイン化された草花文、器全体を葉文だけで覆いつくし、植物の生命力がそのまま動的な魅力となる文様が描かれている。江戸時代の伊万里染付皿にみられた芭蕉文や染付芋葉形皿のユーモラスな意匠が、再び有田でアール・ヌーヴォー様式の素材として蘇り、17世紀後半から18世紀の古伊万里様式磁器のヨーロッパ輸出が、再び幕末から明治にかけて博覧会にわくヨーロッパ市場に向けて再開される。のびやかで華麗な古伊万里の磁器、武者絵から美人画まで盛りだくさんの日本趣味と技術の粹を競った幕末の有田焼を経た今、20世紀の新しい美に挑戦しようとする有田の先鋭知敬の描く図案には、美術工芸・産業工芸を模索する近代の有田焼の気迫が込められている。

明治35年、第5回内国勧業博覧会では知敬が図案審査、出品審査と活躍する¹³。磁器の町有田の積極的

な産業政策を背景に、同38年から陶磁器業組合では毎月図案懸賞募集を実施¹⁴。翌39年には女児陶画練習所を設けて技術指導につとめている¹⁵。

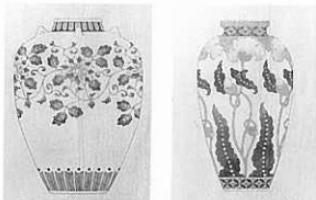
大正3年、佐賀県立有田工業学校を退職した知敬は、深川六助、中島浩気と協力して有田陶磁器品評会（明治29年、香蘭社の深川栄左衛門が始めた：毎年5月1日から一週間）にあわせて陶祖祭、陶器市、職工競技会（図案・製作・着画のコンテスト）、アトラクションの石場相撲などを企画、同4年5月には町中の協力で実現させる。翌6年、陶祖300年祭を記念して陶山神社裏手に「陶祖李參平之碑」を完成、と三人の活動はめざましいものがあった¹⁶。また、同7年、故横尾謙の遺稿『有田陶業史』をまとめて知敬の手で出版、これを受けた中島が大著『肥前陶磁史考』を上梓したのは昭和11年である。

大正9年の『実業之佐賀』誌には、講演の書き起こしから「古陶磁器の鑑賞に就て」が連載され、長年図案を教えてきた知敬らしく、鑑賞のポイントに線・面（線十面→形）・色の視覚と触覚に訴える対象であること、「精巧・綿密・丹精」な工芸美術であり、さらに師介次郎の理想でもあった純美術の精神性を持つことをあげている¹⁷。これはもちろん知敬の創作の視点でもあった。

大正11年2月25日没、享年69歳、有田と陶磁器に魅せられ、明治・大正の工芸界を生き、近代のデザイン思想を学び、機械化されてゆく窯業地有田の現場で試行した生涯だった。

彼の残した図案の詳細については、機会があれば後述することにして、墨書きに彩色された向付皿類は鍋島藩窯意匠の高級品らしい作が中心となっているが、生活用の飯碗、番茶器、急須類には、昭和初期から普及した輪郭線のはっきりしたシンプルな文様が多く、大正期すでに知敬のアイデアとして図案に描かれていることを記しておく。

（学芸員 宮原香苗）



古典的な唐花唐草文の四耳壺と装飾的な芥子文を配した壺

- 註1. 資料台帳には138枚とあるが、実数139枚。器種は花生・萬字鉢・碗・徳利・蓋・コップ・湯呑・番茶器・急須・向付皿の10種、約300図が描かれている。
2. 「徳見宗淳知英とその一族」徳見光三（抜粋）
3. 「肥前陶磁史考」中島浩気、昭和11年（複刻版）
4. 雑誌『日本漆工』第159号、昭和39年4月号
5. 「有田の文様2・徳見知敬篇」井手誠二郎、昭和51年6～8、前掲3
9. 『原色現代日本の美術15・陶芸(1)』鈴木健二、昭和53年
10. 『佐賀県教育五十年史』中篇、西村謙三編、昭和2年11・12、前掲3
13. 前掲2・5
14. 前掲10
- 15・16. 前掲3
17. 雑誌『実業之佐賀』大正9年、第3巻11～12号

韓国の「独立記念館」見学記

昨秋、10余年ぶりに訪韓の機会をもった。旧中央政府跡に移転して新装なった国立中央博物館をはじめ各地の文化施設や史跡をたずね、その整備・拡充されたさまを見学した。また考古学研究で学恩をいただいている先生がたにお会いできたのは嬉しいことであった。

ところで、埋蔵文化財が数多く分布する本県では、朝鮮や中国との交流を物語る遺物が出土する。また彼地のすぐれた文物が古くに招来され、寺社などで大切に伝えられている。それらの資料はわが国の原始・古代の歴史を研究する資料として重要な意義をもつが、ますなによりもその故地の、それぞれの歴史発展のなかでその資料を正しく位置付けることが求められる。このような歴史研究の立場を逸脱した戦前における古代史研究の弊害の顕著な例に、古代朝鮮との関係史の研究があった。その誤った研究成果が、日本による朝鮮の植民地支配を正当化する「支配の歴史的必然性」の主張に利用されたことは現在ひろく知られた事実である。そしていまお豊臣秀吉による侵略、さらには1910年～1945年の植民地化は現代韓国に依然として深い傷跡を残し、また日本は負（マイナス）の歴史として永久に消すことができない。悪しき歴史研究のはたした深刻な結果を証する歴史的教訓である。

ここに紹介する独立記念館は、民族の存立さえも危うくされた韓国の悲痛で苦難の歴史と共に、民族独立への不撓・不屈の輝く誇らしい歴史を紹介するものである。それはまた、私たち日本人にとっては負の歴史を辿る、心痛む旅である。しかしそれでもやはり正視することが未来にとっても意義深いと思われる。

設置の目的・沿革・規模

独立記念館は、忠清南道天安郡木川面南化里230に所在し、1987年8月15日に開館した。この地に設置されたのは、全国からの交通の便を考慮したためとされる。首都ソウルから南へ約100km、高速バスなどを利用すると80分余りである。開館にあわせて新しくインターチェンジも作られた。

敷地は黒城山の南麓に約400万m²（約120万坪）と大きくとり、総建坪は37棟で56,024m²におよぶ大規模な施設である。天空に伸びる白亜の「民族の塔」がまず望遠される。

その設立の目的は、「外侵を克服し民族の自主と独立を守ってきた我が民族の国難克服史と国家発展史



民族の家 — 後方に展示館が見える —

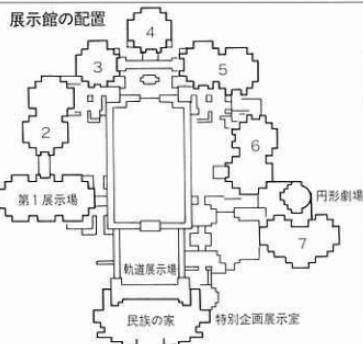
に関する資料を収集・展示することで、国民の透徹した民族精神と国家観を定立するのに役立てる目的とする。」（独立記念館の案内パンフレットより引用。以下「」内は同書からの引用）とされる。

同館の設立は、1945年の解放以来ずっと懸案となっていたが、「日本の教科書がわが国の歴史を歪曲する事件を契機」とする。1982年8月に建立が決定され、全国人民の募金と政府の支援により本年8月15日に開館した。

展示の概要

展示構成は屋外展示と屋内展示からなる。屋外展示は周回道路にそって、愛国詩碑・語録碑や象徴彫刻等が配されている。屋内展示は3・1広場を囲む7つの展示館と円形劇場・民族の家からなる。各館は通路で結ばれて時計回りに見学するようレイアウトされている。しかし観覧者はどの館からでも見学でき、また次の館に入るまでに気分を新たにできる工夫がなされている。

展示の主テーマは、近代以降の民族運動・抗日独立運動にあるが、民族の悠久の歴史と各時代の国難



克服史さらには輝く未来像も紹介されている。各館では小コーナーごとのテーマに即して、解放以後の歴史研究の成果に取りつつ、実証的な資料が展示される。そこでは最新の展示装置や模型・ジオラマ・映像・イラストを援用して、子供たちにもわかり易い展示がおこなわれている。各展示館の概要を次にみてみよう。

第1展示館（民族伝統館）

先史時代以来の歴史と文化の概要や各時代の国力充実と国難の克服をパネルや模型で紹介。豈臣秀吉の侵略軍を打破した亀甲船の模型はその象徴の一つとして展示されている。

第2展示館（近代の民族運動館）

1860年代から1910年代まで、すなわち自主的な近代化の努力が挫折させられ、日帝による国権の侵奪までの近代民族運動・爱国啓蒙運動・義兵戦争関係資料を紹介する。

第3展示館（日帝侵略館）

1876年の開港以降、日帝による侵略の歴史と蛮行の事実が示される。館中央部の大きなモニュメント「苦難克服の韓国人像」は、民族独立運動の途上に躍り天へと昇華する魂を象徴している。

第4展示館（3・1運動館）

1910年代の国内外の独立運動関係を紹介する。
3・1運動は1919年3月1日、民族代表による独立宣言とソウルのバゴダ公園での独立宣言大会を起点として、全国各地に広がった独立万歳の示威運動である。これに対して「日帝は憲兵警察と日本軍・消防隊まで動員して、7,500余名の韓国人を虐殺し、16,000余名を負傷させ、47,000余名を検挙投獄して様々な拷問をほしいままにした」。展示物の前で歩みを止め、重んだ表情で息をのむ多くの姿があった。

第5展示館（独立戦争館）

抗日独立運動は多様な形態で発展・展開された。



3・1精神像（高さ6.25m）——第4展示館——

独立軍の創設と活躍、愛國義士・烈士の闘争、国民各分野での抗日民族運動が紹介される。

第6展示館（臨時政府館）

3・1独立宣言後、上海に大韓民国臨時政府が樹立されて運動を指導し、また外には民族の意志を代弁した。これとともに海外在住者による支援活動が紹介される。

第7展示館（大韓民国館）

1945年8月15日の光復から今日までの歴史が紹介される。南北分断や5・19軍事革命などの試練と混乱の中から発展をなしとげた姿が、祖国統一の意思と未来像を盛り込んで示される。「'88（パルパル）ソウル・オリンピック開催のコーナーは、初めて心なごむ展示であった。

円形劇場

映像「愛する我が祖国」（15分間）が360度の大型スクリーンに投射・上映される。

なお、独立記念館の主要事業には、(1)資料の収集・保存・管理および展示、(2)資料の調査・研究、(3)展示と関連する国民教育、(4)各種刊行物の発行、(5)施設の管理と拡充がある。資料室は第1項の事業をはじめ閲覧関係の業務を行う。収蔵庫は4室（計2,165 m³）あり、9,976件44,646点を収蔵する。また付属の施設に「韓国独立運動史研究所」がある。

以上がその概要であるが、独立記念館は決して日本人への感情的な憎悪や敵愾心を今日新たに喚起するのではなくて、その目的ではないことに深く留意すべきである。しかしそれとは別に、他の博物館を見学したのと異なる感情の高ぶりに襲われた。それは新羅の古都・慶州へと夜を走る車中で一層強くなった。具体的な資料によって示された重い事実、歴史上の一項目として過去の整理箱に追いやりることは出来ない事実に直面したためであった。

隣国同志の友人として交わるとき、特に私達は両国関係において友好の道を誤った諸事実を正しく知ることが大切である。また私たち日本人は今、国際社会の一員としての自覚が求められている。相互の理解と尊重は、お互いの歴史や文化を先ず正しく知ることから始まるのではないだろうか。そのような意味で、開館から未だ日が浅く、日本ではあまり知られていない同館の概要をここに紹介することとした。この「歴史の旅」の同伴者が増えることを願う次第である。

（学芸員 藤口健二）

常設展のご案内

第3期常設展は、11月27日㈭から開催しています。一部は新収蔵品展のために展示替をいたします。

クモキリソウなどの標本で良山系の植生を紹介する自然史部門からはじめり、考古部門では弥生時代の木製品、国指定史跡の土生遺跡から出土した食器用具や農具類を見ることができます。

重要文化財「円鑑禪師坐像」の仏教美術から、歴史へと進めば洪浩然の書「白帝城古詩屏風」が、美

郷土作家を中心構成された近代絵画の一室では、百武兼行（写真「バーナード城下絵」）や岡田三郎助から黒田清輝、藤島武二、青木繁といった画家達の作品がみられます。腹巻丹丘から現在活躍中の立石春美の日本画、古賀忠男の彫塑（写真「線麿」）、フランスの画家ベルナール・ビュフェの版画集「マル



術工芸には写真の「耕織図屏風」、陶磁器、漆器の他、今回特別に肥前国忠吉の初代から九代にわたる名刀の数々を展示しています。クド造り、ジョウゴ造りの民家模型は佐賀の民俗の指針となるでしょう。

ドロールの歌」からの連作（写真・下右）なども御覧ください。

昭和62年度 新収蔵品展のお知らせ

会期：63・3月10日㈭～31日㈭

博物館では、江戸後期に書かれた「肥前名護屋城之図」、柴田是真作「四季の花図」・「月下兎図」などを部門ごとに展示します。

美術館では、岡田三郎助の油彩「風景」、石本秀雄の「籐椅子に凭る女」・「火鉢による女」などのほか、染色家鈴田照次の「型絵染着物 荘の葉文」・「木版摺更紗着物 松竹梅文」を紹介します。

美術館図録のご紹介

石本秀雄 1987(オールカラー)	2,300円
北島浅一・御厨純一 1986	1,800円
近代・九州の洋画家たち 1983	1,500円
高木背水 1982	1,700円
山口猛彦 1981	1,000円
岡田三郎助 1979	1,700円
三根霞郷 1971	700円
山口亮一画集 1971	3,000円

佐賀県出身の画家達がしるした画業を現代の視点でとらえた企画展のシリーズです。

お問い合わせは 佐賀県立美術館 0952・24・3947 までどうぞ。

博物館・美術館報 第79号	発 行 佐賀市城内1丁目15番23号
発行年月日 昭和63年2月1日	佐 賀 県 立 博 物 館
編 集 大 塚 正 道	佐 賀 県 立 美 術 館
	印 刷 ㈲ 大 同 印 刷